旅する漱石先生

～文豪と歩く名作の道～

牧村健一郎

(C)Shogakukan Inc. 2011 All rights reserved.
No reproduction or republication without written permission.
掲載の記事・写真・イラスト等のすべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

北海道・岩内編

余は東京の場末に生れたものであるが、妙な関係から久しい以前に籍を北海道に移したぎり、今に至って依然として後志国の平民になっている。原籍のある所を知らないのも変だと思って、機会があったら一度、海を超えて北の方へ渡って見たいつもりでいたが、つい、つもりばかりで実行の決心は容易に出来ず、来る年来る年を荏苒（のびのびになること）と暮らして仕舞った。

（高原操著『極北日本』序より）

北海道の海辺の町に〝送籍〟せざるを得なかった理由

漱石の本籍は、本人は行ったこともない北海道で、徴兵逃れのためだった。漱石という雅号も、籍を送る意味の「送籍」をもじったのかもしれない――驚くべき話ではないか。漱石学者の間では知られていることのようだが、「徴兵忌避者としての漱石」とは、聞き捨てならない。

というわけで、北海道・岩内に行った。まずは現場である。引用のように、漱石自身は足を踏み入れていないが、漱石の「秘密」に関する重大な場所かもしれない。後志とは、北海道・積丹半島あたりの旧名である。

千歳空港から快速列車一時間で小樽、さらにバスで二時間余、積丹半島の付け根にある岩内町に着く。かつてはニシンやスケソウダラ、さらに石炭で栄えた北海道有数の港町だった。

昭和29（1954）年9月、日本列島を猛烈な台風15号が北上、台風は函館沖で青函連絡船※洞爺丸を沈没させ、死者行方不明千七百人という、日本最大の海難事故を引き起こした。この台風はさらに北へ進み、数時間後、岩内で大火を起こし、町の八割を焼失させた。※水上勉の『飢餓海峡』は、この二つの惨事を題材にしている。

岩内町郷土館館長の坂井弘治さんが、バスターミナルに迎えに来てくれた。岩内は昭和後期、人口が減り、函館本線に通じる岩内線は赤字ローカル線として廃線になり、交通の要はバスターミナルである。北海道らしく幅の広い道路が町を区切っており、人通りは少ない。

まず連れていってくれたのは、住宅地の角にある「文豪夏目漱石在籍地」という高さ二メートルほどの石碑だった。昭和40年代に建てられたという。碑は、店舗わきに無愛想に建っている。案内の人がいなければ、見過ごすだろう。

明治25（1892）年、帝国大学学生、二十五歳の夏目金之助は、兄直矩から分家、東京市牛込区喜久井町から、ここ北海道岩内郡岩内町吹上町・浅岡仁三郎方に本籍を移した。この石碑のあるところが、浅岡家のあったところだ。

岩内
北海道西部、後志総合振興局管内にある町。積丹半島の南の付け根に位置し、町名はアイヌ語の「イワウナイ」（硫黄の流れる沢の意）に由来する。

洞爺丸
旧日本国有鉄道の青函連絡船の船名。昭和29年、台風15号のために函館港で沈没。世界海難史上、タイタニック号の事件に次ぐといわれる。

水上勉
小説家。大正8年生まれ。昭和36年『雁の寺』で直木賞受賞。

(C)Shogakukan Inc. 2011 All rights reserved.
No reproduction or republication without written permission.
掲載の記事・写真・イラスト等のすべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

そのころ、岩内近くに三井が所有する硫黄の鉱山があり、浅岡は鉱山に出入りする商人だった。漱石の兄か親戚が、三井と関係があり、その縁で地元の鉱山の所長を通じて、浅岡は漱石の移籍の便宜をはかったといわれる。

ではなぜ、籍を移したのか。なぜ、岩内なのか。

A説　当時、北海道は早期に開拓する必要から、壮年の兵役を免除していた。漱石は兵役を逃れるために、北海道に籍を移した。（作家・丸谷才一説）

B説　漱石は子どものころ、塩原家に養子に出され、二十一歳で夏目家に復籍している。夏目家は長男次男が早死にし、漱石を跡継ぎに考えたが、塩原家からの復縁の申し込みや金品の無心を防ぐため、遠い北海道に籍を移した。

C説　漱石は兄嫁の登世（とよ）を密かに慕っていたが、登世は若くして亡くなった。兄が新たにもらった嫁を漱石は好まず、同じ籍に入っているのが嫌で、籍を移した。（評論家・江藤淳説）

現在はA説が定説であり、漱石の徴兵逃れはほぼ、間違いないらしい。ただ、宗教や思想信条から、兵士になるのを拒否する「良心的兵役忌避」とは、かなりニュアンスが違うようだ。

▲夏目家の除籍簿の写し

▲夏目漱石在籍地碑

明治25年はまだ、日清戦争の前だ。日清、日露戦争後、いわんや昭和の軍国主義の時代と異なり、兵役に就かないことが非国民とか国家への裏切り者という意識は、後年ほどではなかった。兵役を免れるためのマニュアル本も出ている。しかも国民皆兵といっても明治中期までは、戸主や、兄弟が召集された場合のそのうち一人、官立公立学校教員、同本科生徒などは兵役が免除される。北海道の壮年も免除だった。他人の戸籍を買ったり、名義を一時的に戸主や嗣子としたケースもあった。

江戸っ子の漱石としては、薩長の田舎武士がこしらえた軍隊などに行くものか、という気分もあったかもしれない。いずれにせよ新潟・高田編（117ページ）でも触れるが、漱石はこの件で、さほど「良心の呵責」を感じてはいなかったと思う。引用文の調子からも、それはうかがえる。若い日の兵役逃れが、生涯、漱石のトラウマになった、という説もあるが、同意できない。

除籍簿にみる夏目家の系譜

郷土館で坂井さんに、夏目家の除籍簿の写しを見せてもらった。

引用にあるように、漱石は明治25年に籍を移したまま、戸籍はずっとほうっ

▲蝦夷富士とも呼ばれる羊蹄山

(C)Shogakukan Inc. 2011 All rights reserved.
No reproduction or republication without written permission.
掲載の記事・写真・イラスト等のすべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

ておいたままだった。結婚や次々に生まれた子どもの誕生届けは、それぞれの所在地の役所に届けるが、その届けが本籍のある岩内に送られ、戸籍に書き加えられる。その間、松山、熊本、ロンドンに生活し、大正3（1914）年、死の二年前に、ようやく、実際に住む東京・早稲田南町に籍を移し、東京人に戻る。なぜ長年、ほうっておいたのかはわからない。

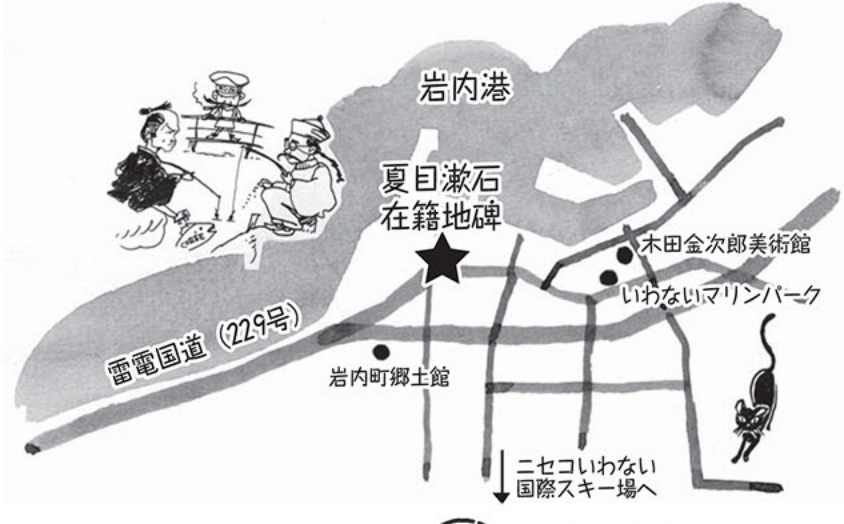
岩内は除籍になった。見せてもらった除籍簿はその写しで、全体にバッテンが大きく書かれている。ここから、本人や妻鏡子（戸籍にはキヨと書かれている）ら家族の正確な戸籍事実がわかり、子どもたちの生年月日も確認できる。五女ひな子だけには、本人のところにも小さなバッテンがあるのは、一歳半で死去した際、届けを受けた役場の書記がバッテンをつけたのだろう。

ところで、引用の著者である※高原操とは、漱石の五高の教え子で、大阪・箕面に案内した大阪朝日の記者である（148ページ）。彼は日露戦争で日本の領土になった南樺太を旅行、明治44年夏の大阪朝日の関西講演会で、漱石の「前座」で、樺太について講演している。旅行記をまとめて本にする際、漱石に序文を頼んだのだろう。『極北日本』は大正元年12月発行で、漱石はこの序文を同年10月に執筆したとされる。

高原操
新聞記者。大阪朝日新聞社に入社、経済部長を経て大正7年取締役に就任。編集局長、主筆などを務めた。

羊蹄山
北海道南西部、渡島半島の基部にある山。後志火山群の一つで、標高1898メートル。円錐状火山で蝦夷富士とも呼ばれる。

さて、岩内は魚介類のおいしいことで知られ、札幌あたりから食べに来る人は多いという。積丹半島も近いし、日本百名山の一つ、※羊蹄山やニセコスキー場もさほど遠くない。北海道を旅行する漱石ファンは、ちょっと足を伸ばしてみてはいかが。坂井さんによると、年に数回、この碑を見に来る人がいるという。漱石ゆかりの地としては異色だが、ここまで来る人は、筋金入りの漱石ファンとみなされるだろう。



アクセス
夏目漱石在籍地碑
北海道岩内郡岩内町御崎
バスターミナル徒歩15分

(C)Shogakukan Inc. 2011 All rights reserved.
No reproduction or reproduction without written permission.
掲載の記事・写真・イラスト等のすべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。